



泉丘SSHだより



第10号 H20.10.27

編集：SSH推進室

発行責任者：山下一夫

石川県立金沢泉丘高等学校

2年人間科学特別講義 「未来医療における倫理性」

9月12日（金）の5・6限に2年生「人間科学」の特別講義が行われました。講師の金沢大学医薬保健学域医学類の中本安成先生は本校のOBで、後輩たちに、医療の現場からの熱いメッセージを送っていただきました。



○ 医療とは、何も病気を治すことではない。世の中を、いつもは広角レンズを通して見て、時々ズーム機能を使うデジタルカメラのようなものだと感じた。医療の目的は言うまでもなく、病気を治療することである。しかし、それだけに固執するようなことがあってはならない。分かりやすい例で言えば、人体実験である。何か画期的に違いのないであろう薬を発明したとしよう。発明者としては、早く人間に対して使用が認められて、世に名前を知られたいと思うだろう。早くそのことを実現させるためには、人体にその薬を投与し、その有用性を確かめることであろう。しかし、それは倫理的に問題がある。人として行うべきでない行動であるということである。倫理ばかりに固執することは、医学の進歩を妨げることになり、本末転倒である。意味がない。医学だけでもまた然り。

今回の講義では、私は医学部への進学を考えているわけではないので、直接に将来への指針となったわけではなかった。しかし、物事をつきつめるときには、そのつきつめべき事柄だけに固執しては全体のバランスが失われ、結局、何も得られないのだということが分かった。これは一般化できる事実であると思う。

私は、1年半後には確実に大学受験をすることになるが、それだけに固執することなく、（当然、合格することが第一の目標である。）広い視野を持ってバランスのとれた日を送っていこうと思う。

○ 今回の講義では、主に二つのことについて話されていたように思う。一つ目は肝臓ガンについて問題点や治療法などの話で、二つ目は今回のテーマの通り未来医療における倫理性に話だった。僕は特に、二つ目の話に興味をひかれた。

医療の技術の進歩は、今まで受けてきた数多くの講義の影響もあり、強く感じることもある。その



ときに、人類はどこまで踏み込んでいいのか、といった倫理観の問題は必ず生まれてくる。生命の重さが薄れてしまうようなことは絶対にあってはならず、命は尊いものであるはずだ。

今回の講義では、医療の役目とは、余命を幸せなものにすることである、と話していた。一人の人間が幸せなものになるよう導くことが医療だという考えには、とても感銘を受けた。自然界におけるルールを破るわけではなく、幸福を追い求めるために「医療」があるのなら、それはすばらしいことだと思うし、医者はみな、本当に偉大な人達だとあらためて感じた。

- まず初めにガンの話から始まった。中本先生は肝臓ガンの研究を行われていて、私の肝臓ガンについての考え方が深まった。肝臓ガンがどういうふうになっていくかが分からなかったが、実は肝硬変から進行していくことを知った。また、肝硬変になった人は1年に8%、10年で7、8割の人が肝臓ガンになることが分かった。

次に倫理の話だった。金沢大学でも開発部、臨床部、検証部の3つの部門に分かれていて、第三者の目から倫理に反していないかを調べる部門があることに驚いた。

また、人は長く生きすぎることはいけないとか、という問いに対して、自分はしっかりとした考えを持っていなかったが、人間の進化という面で考えたとき、一人が生き続けると違った視点から考察できなくなり、発展していかなくなる、という先生の話聞いて、なるほどと思った。

最後の質疑応答の時、安楽死を先生はどう思うか、という質問があった。私は患者が苦しい思いをして死ぬくらいなら、安楽死をさせるべきだと思っていたが、先生は周りが決めつけているのではないか、という考えだった。よく考えてみると、自分が苦しい治療をしていると思っているだけで、実は患者からしてみれば、治りたいと思う気持ちの方が強いのではないかという考えに変わった。

この講義を聴いて、医療の倫理について深く考えられるようになったと思う。

- 今日はガンについてやマウス実験について、医療や生命倫理についての話を聞いた。はじめの方、先生は「人はガンといわれるとドキッとす」とおっしゃっていたが、実際わたしは「あなたは大腸ガン」と言われ、ありえないとはわかっていてもその言葉に恐怖を感じた。ガンの治癒率は高くなっているといっても、やっぱり治らないものも多いそうだ。特に肝臓ガンは早期発見しても再発する可能性が大きく、再発を繰り返して死に至る、という話をきいて、やっぱりガンは恐ろしいと思った。苦しんで死に至るということをきき、尊厳死や安楽死についても考えさせられた。先生もおっしゃっていたが、本当に難しい問題で、簡単には答えが出せないと思う。でも、目の前の苦しんでいる人を助けてあげたいから医療を行っているのだという先生の考えをきき、やはりそういう思いが大切なのではないかと思った。

また、先生は技術革新と生命倫理についてもおっしゃっていた。現在の発達した医学なら、たとえ自然の摂理を超えていることでもできるかもしれないが、これは先生もはっきりした答えを出さなかったように、難しい問題だと思う。もし人間が死なないようにになったら??これは医療の極限だとは思いますが、そうなったら他の問題がたくさんでてくる。自然に従うことが一番なのかなと思った。

- 今回の倫理問題についての講義を受けて思ったことは、白黒つけがたい分かれ道が多いということだ。iPS細胞にしても、「成長すれば人間になる」というような問題点は無くなったものの、導入されることによって多くの命を救う代わりに人口増加を促すことになるし、結局のところ、本当に人々を幸せにできるかどうかは分からない。また、そのような面がお金で解決されることが万一あったらと思うと、とても不安だ。その方がずっと早いかもしれないが、気づかないうちに別の人が苦しむことになるかもしれない。一度進んでしまえば後戻りできないというのが、医療技術の怖い所だと思う。その大事な決断をする責任を問われるのが医者であって、そんな仕事を職業として持つには相当の決心がないといけないと感じた。

途中でいくらなんでもやり過ぎだと思ったのは、100歳の女性の出産も可能だということや寿命の延長だった。出産はまず子を産むための体力がある間、つまり若いときが望ましい。それは、高齢出産がいかに困難であるかということから明らかだ。自然の摂理に逆らうにも程があると思う。また、寿命の延長については、あまりにも死から目を背けすぎではないかと思う。無くなる物、かけがえのない物であるから大切に生きて生けていけるのであって、死を受け入れないことは、同時に生を捨てることにつながると思う。何事にも光と陰がある。その光という明るい面を見すぎて目が眩んでしまわないよう、陰にも向き合っていくべきだと思った。



- 今日の講義では、ガン治療の高度さに驚かされ、技術革新と生命倫理の微妙な関係に考えさせられました。

ガンについては、これまでのコスモサイエンスなどでも説明してもらったりもしましたが、今回の講義でも手ごわい物だなと思いました。一瞬の見落としが命取りになるガン治療をする医者とはとても責任重大な大変な仕事だと改めて感じ、それでも、人の苦痛や不安を取り除くことに喜びを感じ、私生活に少しぐらい支障をきたしても医者という仕事に生き甲斐を感じている中本先生はすごいなあと思いました。泉丘高校のOBで中本さんのように尊敬できる方はたくさんいて、そんな方々に続けるかどうか自信はないけれど、私たちを見守ってくれていて、期待してくれている人をうらぎるような行為は決してしないでおこうと思った。



最近では、医療の技術も目覚ましく進歩し、長生きする人が増え、発展途上国にも医療団体が派遣され、多くの命が救われています。しかし、人口増加などの問題も起こり、私たちが進歩しすぎたせいで、人類が不自然な状況におちいつていることも事実です。そのうちもっと技術が進歩すると、人が死ななくなったりするうれしいような恐ろしいようなことも可能になるかもしれません。そのように私たちが自然の流れに反して行っていることは、もはや踏み込んではいけないゾーンに入っているのではないかと思っても、この流れは止められないし、目の前にある自分のやるべきなのかなあ……など考えていたら、頭がごちゃごちゃしてきました。

- 今回、「未来医療における倫理性」というテーマで講義を聴いた。近年、iPS細胞の開発や遺伝子治療等、医療の分野において、これまでは考えられなかったような進歩を遂げている。しかし、未知の領域に踏み込むに従って、倫理という新しい問題がもちあがってきた。例えば、「代理母」の問題等は特に大きく報じられたので、注目の高い問題である。科学の進展を手放しで推奨すべきなのか、ある程度のところで踏みとどまるのか。人類の進歩のターニングポイントにさしかかっているように思われる。

今回の講義でお話いただいたなかで、人間はただ長く生きればよいというわけではなく、幸せに生きられるかどうかの方が大切なのだということが印象に残った。たとえ医学で200歳まで生きられても苦痛に耐えるだけの人生なら楽になった方がよいという。確かに、その方が生物として自然なのかもしれないが、だとすれば、つまるところ安楽死を認められることになるのではないかと思った。安楽死についても質問させていただいたが、やはり何が正しいというのは計りかねる。人類の進歩はもちろん申し分ないことだが、これからは一人一人の幸せを追究するということに、ベクトルを向けるべきではないかと思う。

- 今回の特別講義を聞いて、新しく知ったことがたくさんあり、有意義だった。肝炎が肝硬変になり、さらに肝硬変が肝臓癌になるという過程を初めて知った。C型肝炎が日本で増えていると聞いたが、それは食文化の変化といった理由があるのだろうかと思った。C型肝炎が進行してC型肝硬変になると、1年に7～8%の人が癌になるというのは驚いた。しかも累積率が直線なので、10年たったら癌になる人が70～80%になるというのには本当に驚いた。肝臓癌の三大成因のうち肝硬変だけが減らないのも何となく分かる気がした。減らすには肝炎にならないように生活していき、なったとしても治療するしかないと思う。ただ、まだ癌ではないから大丈夫と思う人もでてくると思うし、だからこそなかなか減らないのかもしれない。また、がん遺伝子やがん抑制遺伝子というものがあり、そういう要因より環境ががんにするということも聞いた。だから生活習慣病の一部が癌であるということもわかり、また、生活習慣をきちんとしていく必要があることがわかった。

マウスなどで動物実験をするが、種の特異性というものがあるので、遺伝子を入れていることも知った。人間で行うのは倫理的問題があるので、できないというのはわかるが、面倒な手間隙かけるのは大変だろうと思う。

医療が発展するとともに倫理的問題についても考えないといけないけど、「医療は苦しんでいる方を幸せにする」という点は常に変わることはないと思うし、大切な考え方だと思う。

○ 私は将来、大学の医学部に行って、医者になりたいと考えている。今回の講義は医療に関するものだったので、とても興味を持って聞くことができたと思う。前半は主に癌の話聞いた。その中でも肝臓癌の話が多かった。肝臓癌は肝硬変が進行すると発生する可能性が高い。また、肝炎ウィルスは生物の種類によって特異性がある。だから人間以外の動物を使って癌治療を行うのが難しい。肝臓癌にならないためには、癌になりやすい肝硬変をあらかじめ防いでおくのが一番よいと思う。そのためには、肝臓に負担をかける飲酒や、脂肪分のとり過ぎなどは控えなければいけないと思った。新しく肝臓癌の治療法として免疫療法・遺伝子療法などが注目されている。免疫療法とは、患部に樹状細胞を投与し、リンパ細胞に癌細胞を破壊させるものである。この研究はかなり注目され、更なる発展を目指している。これらの現在の先端に位置する先端医療より更にすすんだ未来を目指した医療は未来医療と呼ばれている。しかし、これらの医療は人体に使っても安全で、副作用のないことを確認しなければならない。更に倫理的妥当性を示したり、患者から治療について了承を得ることが必要である。現在、倫理的観点から未来医療には問題点がたくさん残っているが、私は将来医師になって、未来医療についての問題点を一つでも多く解決し、少しでもこれからの医療の進歩に貢献していきたいと思う。

○ 特別講義を聞いて、まず驚いたのが、どのようにしてヒトは肝臓ガンになるのか、というお話です。肝臓ガンはガン細胞が増殖したり、ガンの抑制遺伝子が減少したりして発症する場合は1割程度しかなく、ほとんどは肝硬変という肝炎が悪化したものが更に悪化して肝臓ガンになるということを初めて知り、とても驚きました。

実際に見せていただいた肝臓の写真でも、正常片はお肉のレバーのようなとてもきれいな色をしているのに、肝硬変→肝臓ガンと悪化していくうちに色や大きさが変化していて、DNAの白い部分や赤い部分が見えて、いかにも恐ろしいなあという感じがしました。

また、肝臓ガンについての実験のため、マウスを利用するとき、普通にヒトの肝炎ウィルスを注射しても、ヒトと動物の肝炎ウィルスが違うため、ちゃんとした実験ができないので、マウスの受精卵にヒトの肝炎ウィルスを注射して、正確な実験ができるようにするというのも初めて聞き、すごいなあと思いました。

そして、テーマである倫理性についてですが、講義を聞き、中本先生は、医療がたとえ進歩しても、その医療をほどこされる人が幸せに感じなければ意味がないというように、その人が幸せかどうかに関心を置いていらっしゃるのことがわかりました。

私も先生の考えに賛成で、これから先、いろいろな医療技術は進歩していくだろうが、たとえ不老不死の薬みたいなものができたとしても、人間の幸せにそれがつながらなければ、その医療は利用してはいけないものだと思うし、そういった人間の幸せに関心をかけたものが倫理性かなあと思いました。

